

近代日本に登場したひとつの歌のことだけで一冊の本を書く。その着想、ひとつ目の歌を追い続けた熱意に感嘆する。

『ゴンドラの唄』。『いのち短し、恋せよ、少女……は今も広く歌わされている。いわば懐メロ。

この歌は、大正四年（一九一五）に島村抱月率いる芸術座が、帝劇で『その前夜』を公演した際、主役の松井須磨子が劇中歌として歌つて人気になった。

原作はロシアのツルゲーネフ。

トルコの圧政と戦うブルガリア人の青年が肺病のためヴェネチアで客死する。この水の都で、ロシア人の恋人を演じる松井須磨子が歌つたのが『ゴンドラの唄』。

無論、原作にはない。芸術座の前年の公演、トルストイ原作『復活』の劇中歌『カチューシャの唄』を松井須磨子が歌つて大ヒットしたので、それに倣つた。

作曲は同じ中山晋平。作詞は歌人の吉井勇。歌詞には、森鷗外訳のアンデルセン『即興詩人』や、与謝野晶子の歌集『みだれ髪』の影響が見られるという。

「恋せよ」とあるように恋愛讃歌。同時に、人間の命には限りがあるのだから生きているいまを大事にせよという生の讃歌にもなっている。この指摘が面白い。古くから

## 川本二郎

〔評論家〕



甦る「ゴンドラの唄」  
「いのち短し、恋せよ、少女」の誕生と変容

相沢直樹 著  
新曜社 3360円  
装丁／難波園子

このページ

ヨーロッパ文化に流れる「カルペ・ディエム」（いまを楽しめ）の考え方と通い合うという。

当初、この歌を中山晋平は失敗作と思っていたし、吉井勇もさほど思い入れを持つていなかつたというのは意外。

ところが一本の映画のなかで印象的に歌われたために、二人とも自分たちの作つた歌を改めて見直すことになつた。

言うまでもなく黒澤明監督の『生きる』（52年）。志村喬演じる、癌で余命いくばくもない男が公園でブランコに揺れながら『いのち短かし……』と歌い、多くの観客に感動を与えた。『生きる』によつて『ゴンドラの唄』が復活した。しかも恋愛の歌から、生のはかなき、いとおしさの歌になつた。

ひとつの歌に文学から映画までさまざま要素から語る力作。